

〔被覆資材を活用した直売用野菜の作期拡大〕
4月どりブロッコリーにおける定植時期が生育および収量に及ぼす影響

沼尻勝人・野口 貴・海保富士男
(園芸技術科)

【要 約】定植時期をずらして展開葉数が2枚および3枚、4枚の時期に定植した結果、早く定植するほど収穫日は前進化されるが、「ウィンベル」の着色やリーフィ、「グランドーム」の茎割れやリーフィといった花蕾の生理障害が増える傾向がある。

【目 的】

中早生および中晩生品種を12月に播種し、定植後2枚重ね1段トンネル被覆をすることで4月中旬から収穫できることを明らかにしたが、定植時期の影響は不明であった。そこで本試験では、同日播種で定植時期をずらした場合の影響を明らかにする。

【方 法】

2013年12月10日に「ウィンベル」および「グランドーム」を播種し、無加温パイプハウスで育苗した。定植日は1月30日および2月5日、2月17日としたが、その際の展開葉数は2枚および3枚、4枚となった。栽植様式は、畝幅70cm、株間35cmの2条植えとし、透明マルチを使用した(4082株/10a)。いずれの定植日も全量基肥とし、N-P₂O₅-K₂Oを成分量で15-18-15kg/10a施用した。定植後は、ユーラックカンキ4号(外側)およびベタロンDT-650(内側)による2枚重ね1段トンネル被覆とし、外側を3月25日、内側を4月4日に除去した。

【成果の概要】

1. 収穫日は、定植日が遅れるほど遅くなったが、定植してから収穫するまでの生育日数は、定植を遅らせるほど短くなった。そのため、「ウィンベル」の定植日の日数差は1月30日と2月17日で18日であったが、収穫日の日数差は8日に縮まった。「グランドーム」にも同様の傾向がみられ、収穫日の日数差は3日となった(表1)。
2. 定植が遅れ育苗日数が増加するとともに両品種の葉数は有意に増加した。草丈は「ウィンベル」で有意に増加したが、「グランドーム」ではいずれの区も同等であった(図1)。
3. 収穫時の生育や収量への影響は、2月17日定植の「ウィンベル」において草丈および花蕾重、花蕾径、花蕾高、茎径の有意な増加に認められたが、その他の調査項目や「グランドーム」では認められなかった(表2)。
4. 花蕾に発生する生理障害は、定植日の遅れとともに「ウィンベル」の着色やリーフィおよび「グランドーム」の茎割れやリーフィが減少する傾向がみられた。
5. まとめ：同日に播種し、定植時期をずらして展開葉数が2枚および3枚、4枚の時期に定植した結果、早く定植するほど収穫日は前進化されるが、「ウィンベル」の着色やリーフィ、「グランドーム」の茎割れやリーフィといった花蕾の生理障害が増加する。少しでも早どりを図る場合は、播種時期を早め葉数3~4枚で定植する。

